

信 行 要 文 ②

第八回 法華講夏期講習会 第二期

皆さん、おはようございます。

本年度の夏期講習会も、今回で第二期を迎えることとなりました。皆様方には、信心強盛に御登山され、まことにおめでとうございます。わずか二日間ではありますが、御戒壇様のもとでしっかりと行学を練磨していくということは、まことに大切なことだと思います。どうぞ、そのおつもりで、本日の講義もお聞きいただきたいと思います。

さて、前回の第一期では『南条殿御返事』の途中で終わってしまいました。つまり南条時光殿のことや、このお手紙についての説明だけで終わってしまったわけです。ですから、今日は改めて五番目の『南条殿御返事』についてお話したいと思います。

5 南条殿御返事

迦葉尊者かしょうと申せし人は、仏えんぶだいについても閻浮提第一の僧なり。俗にてをはせし時は長者にて、くらを六十、そのくらに金こがねを百四十こくづつ入れさせ給ふ。それより外ほかのたから申すばかりなし。この人の先せん生せいの御事を、仏にとひまいらせさせ給ひしかば、むかしむかしううえたるよよに、むぎのはんを一いぱひ供養したりしゆへに、切利天とうりてんに千反せんべん生まれて今いま釈迦あ仏もんに値あひまいらせ僧の中の第一とならせ給ひ、法華経にて光明如来と名をさづけられさせ給ふと、天台大師もん文句もんの第一にしるされて候。(御書八八二ご一ご二行目)

まず、この御書について簡単に御説明しますと、これは建治元(一二七五)年七月二日、大聖人様が五十四歳の時の御書であります。

初めに南条時光殿が白麦一俵などの御供養をしたことに対し、釈尊の弟子である阿那律尊者あなりつと迦葉尊者かしょうの事例をもって、御供養の功德を述べられます。そして今、山中で飢え死にせんとする法華経の行者、つまり大聖人様を救われる功德を述べて、南条時光殿の供養を褒め讃え、「をくりたびて候御心ざしは、麦にはあらず金こがねなり、金にはあらず法華経の文字なり」(御書八八三ご一)

と仰せになっております。つまり、時光殿が大聖人様に御供養せられた志が尊いことを「頂戴した麦は金である」と述べられ、さらには「金にあらず、それは法華経の文字である」とお褒めあそばされているのであります。そして最後の端書きに、今、日本国が他国の責めを受けるのは、まさに幕府が大聖人様を迫害した総罰であることを明かされているのであります。

この御書の最初の部分には、まず阿那律尊者について述べられております。この方は釈尊の

いとこ
従弟に当たる人で、十大弟子の一人であります。また、天眼第一てんげんと言われておりまして、天眼とは、ものがよく見える、天人の眼ということです。

なぜ阿那律が天眼第一なのかというと、この方は、仏様の説法中に居眠りをしてしまう癖くせがあったのです。そのため仏様にしかられたので、「今後は絶対に眠らない」と不眠の誓いを立て、眠りを断たったのです。すると、それが原因で眼病わづらを患い、失明してしまいましたが、その縁によって天眼を得ることができたというのです。すなわち、肉眼は失ってしまったが、心の眼が開き、すべてのものがよく見えるようになったというのです。

阿那律尊者については、テキストに載せた御文の直前に次のようにあります。

「仏の御弟子あなりつに阿那律尊者と申せし人は、をさなくしての御名にょいをば如意と申す。如意と申すは心のおもひのたからたをふらしゆへなり。このよしを仏にとひまいらせ給ひしかば、昔むかしうえたるよに、縁覚と申す聖人を、ひえのはんをもて、供養くやうしまいらせしゆへと答へさせ給ふ」(同 八八二頁)

幼いころの阿那律尊者は、思いのままに宝を降らすことができたので、如意と呼ばれていました。なぜ、そのような力があつたのかを仏様に伺ったところ、昔、飢えた時代に縁覚へ稗ひえの飯を供養した功德によって、そのような計り知れない大きな果報を受けられたのだ、と答えられたのです。

また、迦葉尊者という方は、阿那律尊者と同じく釈尊の十大弟子の一人であります。この方は頭陀第一ずだと言われており、法華經の授記品第六で光明如来の記別を受けております。

この『南条殿御返事』では、阿那律尊者のお話のすぐあとに前掲のテキストの御文がありまして、ここで迦葉尊者について述べておられます。内容を要約して申しますと、

「迦葉尊者という方は、仏に次いで世界第一の僧である。在俗の身であった時は大長者で、蔵くらを六十も待ち、その蔵くらに金かねを百四十石ずつ持っていて、それ以外の財宝も数えきれないほどであった。この迦葉尊者は前世においていかなる善根を積んで、かくの如くなつたのかと仏様にお伺い申し上げたところ、仏様は、迦葉尊者の本事を示されて、昔むかし、飢饉ききんの世に辟支仏びやくしぶつに麦の飯一杯を供養したが故に、忉利天に千べん生まれ、今、釈迦仏あに値あって僧のなかでの第一人者となり、法華經において光明如来という未来成仏の時の名を授けられたのである。このことは、天台大師が『法華文句』の第一に記されている」

ということを仰せであります。

このように、辟支仏に麦の飯を一杯御供養した功德によって、忉利天に千べんも生まれ、法華經えきの會座えざにおいては光明如来という未来成仏の記別を授けられたというのですから、まさに御供養の功德がいかに甚大であるか、それをこの御妙判によって示されているのであります。

先程、釈尊の十大弟子ということを申しましたが、これは釈尊の代表的な十人のお弟子さんのことです。それはどなたのことかと申しますと、まず舍利弗しゃりほつ、次に摩訶迦葉まかかしょう、三番目に阿難あなん、四番目が須菩提しゅぼだい、五番目が富楼那ふるな、六番目が目連めつ、七番目が迦旃延かせんねん、八番目に阿那律あなりつ、九番目に優波離うぱり、十番目が羅睺羅らごらであります。皆さんもどこかでお聞きになったことがあるお名前だと思い

ますが、これらの方々が釈尊の十大弟子と呼ばれるのです。

一番目の舎利弗は、初め外道であったのですが、のちに釈尊の弟子となって智慧第一と呼ばれるようになりました。

次の摩訶迦葉という方は頭陀^{ずだ}第一と称されております。頭陀とは頭陀行という修行のことです。よく他宗の僧侶などが胸にぶら下げている頭陀袋というものがありますが、本来、頭陀とは少欲知足^{むね}を旨とし、衣食住に関する貪欲^{どんよく}な心を払いのけて仏道修行に励んでいくことを言います。具体的には、食べ物を乞いながら野宿などをし、旅を続けるという苦行をするわけですが、ですから、そういった修行をする僧侶のことを頭陀と言ひ、頂戴した物を入れる袋を頭陀袋と言うようになったのです。要するに、少欲知足に徹し、人から頂戴した物を大事に食して旅を続けていくという修行を続けたので、頭陀第一と言われたのであります。

続いて、阿難という方は多聞^{たもん}第一と言われ、釈尊の説法をたくさん聞いた方でありました。のちに小乗教を弘めるのですが、非常にたくさんの方を聞いて伝えていくということにおいて一番の方であったのです。

須菩提という方は解空^{げくう}第一とわれ、「一切は空である」という空の法門をよく解っている方でありました。

また、富楼那という方は、山の中に入って苦行を積み、そののち釈尊の成道を聞いて弟子になった人でありました。この方は説法第一と言われておりまして、法を説くことが大変お上手であったのです。

目連尊者という方は神通第一と呼ばれており、この方はお盆のお話に出てくる方でありました。これは盂蘭盆^{うらぼん}経に説かれてありまして、目連尊者の母である青提女^{しょうだいによ}が餓鬼道^おに堕ちて苦しんでいたのですが、目連尊者の神通力をもってしても救うことができず、仏の教示によって初めて、母を苦しみから救うことができたという話であります。

それから迦旃延^{あぢな}という方は論議第一で、論議が巧みであったのです。

また、阿那律^{あなりつ}という方は釈尊の従弟^{いとこ}に当たる人であり、先程も申し上げましたように天眼第一であります。

そして優波離^{うぱり}という方は、持律第一と言われております。

最後の羅睺羅^{らごうら}という方は、釈尊のお子さんであります。釈尊が出家得度する前にもうけた子供でありまして、十五歳の時に出家し、よく戒を持って修行を積み、密行第一と呼ばれた方でありました。密行というのは秘密の修行ということで、羅睺羅の修行というのは非常に細微にわたるものでありましたので、他の人にはなかなか解らないのです。そういう修行を、一つひとつ細かく積んでいかれたのであります。

このように、釈尊には十大弟子という代表的なお弟子さんがいたのですが、十人十色とでも申しましょうか、それぞれ智慧第一、頭陀第一、あるいは論議第一であったり、皆がその分野におけるエキスパートなのです。そういった方々が釈尊を、また教団をお護りしていたのであります。

「桜梅桃李^{おうばいとうり}」という言葉があります。桜や梅などは皆、それぞれに特徴があります。我々も同じ

ではないでしょうか。日蓮正宗を、皆で護っていく。それぞれが分ぶんに忠じて、桜は桜、梅は梅として、しっかりと護っていく。また、寺院を護ることも同じであります。寺院の御本尊様をどうやってお護りしていくかを考えねばなりません。

つまり、皆が同じでなくてもよいのです。かつて、釈尊やその教団を護ってきた十大弟子がそうであったように、それぞれが自分の得意分野において力を発揮し、その上で心を一つに合わせれば、折伏もできるし、お寺も繁栄し、日蓮正宗が興隆していくのです。そして、御本尊様をしっかりとお護りすることができるのです。ですから、なんでも人の真似ばかりしなくてもよいのであります。

もちろん、良いことは大いに真似をすべきであって、その上で、それぞれの特徴を活かして信心活動に励んでいくというとは、まことに良いことではないかと思えます。

余談になりますが、十大弟子のあとの時代に「付法蔵ふほうぞうの二十四人」という方々がおります。先程の迦葉尊者という方は、お釈迦様が亡くなったあと、第一番の弟子として二十年間、小乗教を弘通して、そののち阿難に法を譲っているのです。

大聖人様の仏法には付嘱の次第ということがあります。同じように釈尊の教えにも、正法時代に釈尊から付嘱を受けて、その教えを次々に付嘱して布教していった方々が二十四人いらっしゃるものであり、その方々のことを付法蔵の二十四人と言います。

それぞれ名前を挙げると、摩訶迦葉まか、阿難あなん、摩田提まだんたい、商那和修しょうなわしゅう、優波鞠多うぱきくた、提多迦だいたか、弥遮迦みしゃか、ぶつだなんだい 仏陀難提、ぶつだみつた 仏陀密多、きょうびく 脇比丘、ふなしや 富那奢、めみょう 馬鳴、かびまら 迦毘摩羅、りゅうじゆ 竜樹、かなだいば 迦那提婆、らごら 羅睺羅、そうぎやなんだい 僧伽難提、そうぎややしや 僧伽耶舍、くまらだ 鳩摩羅駄、じゃやた 闍夜多、ばしゅばんだ 婆修槃陀、まぬら 摩奴羅、かくろくな 鶴勒那、師子となっており、最後の二十四人目の方が有名な師子尊者であります。

この師子尊者については、非常に大事なことが伝えられております。ある文献によりますと、師子尊者けいひんが罽賓国で布教をしていた時、国王だんみらの檀弥羅王という人は邪見が強盛で、多くの寺塔を破壊したり僧を殺すなどの迫害をしました。そして、ついには師子尊者の首までも切ってしまったのです。しかし、師子尊者の首からは一滴の血も流れず、ただ白い乳のみが出たというのです。これは、師子尊者がびやくほう白法たもを持っていて、また成仏したことを願っているとされております。

『撰時抄』にも、

「檀弥羅王は師子尊者の頭こうべを切りしかば、右の手刀とともに落ちぬ」(同 八四四ぎ)

とあります。つまり師子尊者を切った檀弥羅王の右の手が、刀とともに落ちてしまったと言われていたのです。この方については、ほかにも色々な御書に出てきますので、覚えておいていただきたいと思えます。

テキストの御文に話を戻しますが、要するに、御供養の功德がいかにかに尊いかということ、この御文から知ることができると思えます。

御供養ということについては、このほかにもたくさんの御書に御教示があります。『時光殿御返事』(御書一二四六ぎ)等にも同様のことが説かれておりますし、皆さん方も聞いたことがあるかも知れませんが、得勝童子じゅどうとかこんじき儒童菩薩のお話や、すだつ金色王の話、あるいは須達長者ひんの話、また貧

によ ひとつ
女の一灯というお話も聞いたことがあると思います。

得勝童子と儒童菩薩については『上野殿御返事』のなかで、
「得勝・無勝の二童子は仏に沙の餅を供養したてまつりて閻浮提三分が一の主となる。所謂
阿育大王これなり。儒童菩薩は錠光仏に五茎の蓮華を供養したてまつりて仏となる。今の教主
釈尊これなり」(同 七四四頁)

とあります。阿育大王は仏滅後百年ほどのち、インドの国を統一して仏教を盛んにした大王であり
ますが、その方の前生を訪ねますと、昔、仏様に砂の餅を御供養し、その功德によって大王とし
て生まれたというのです。

また、儒童菩薩という方は釈尊の前身でありまして、この方は昔、五つの茎の蓮華を仏様に奉
った功德によって、今日、釈尊として生まれ変わったという前生譚がここに説かれているのです。
これらもすべて、仏様に御供養した功德によるものなのであります。

また金色王という方については、詳しくは『大田殿女房御返事』(御書一二七二頁)に説かれて
います。金色王というのは、釈尊の因位修行の姿、つまり釈尊の過去世の姿でありまして、金色王
経に説かれているのであります。

この王は人格者であり、また非常に裕福でありました。そして商人や人民の税金や賦役を免
じ、徳政を行って、長い間、国を安泰に治めていました。ところが悪星が出現し、天変地変が起き
て、十二年の間、全く雨が降らなくなってしまった。その結果、人民はことごとく飢えてしまい、餓
死する者がたくさん出てきた。そこで王様は、国中の穀物をすべて集めて大きな倉庫に貯蔵し、
自分をはじめ全人民に、食べ物均等に配布した。その時、そこに過去四十劫の間、菩薩行を
積んだ辟支仏縁覺世尊という辟支仏が現れ、王の所にやってきて一食の供養を求めたのです。
そこで、王様は自分に残された最後の一食分の食事を、その辟支仏に御供養しました。すると、
その功德によって、なんと供養をした翌日から七日間、様々な穀物等が天から雨のように降って
きたのです。また、それ以降は、七日ごとに衣食住の必需品や七宝が降り注ぎ、そのために人民
は長い間、貧乏から逃れることができたのです。これもひとえに、王様が最後の一食を辟支仏に
御供養した功德なのであります。

また、須達長者という方は祇園精舎を建立した方で、舎衛城の長者であります。父なき者を
孤、老いて子なき者を独と言って、合わせて孤独と言うのですが、常にこの孤独を哀れみ、衣食
を分け与えたので、給孤独と称されたのです。そして釈尊に帰依し、祇園精舎を建立して御供養
したのです。ですから、祇園精舎のことを給孤独園とも言うのです。

釈尊は二十余年間、ここに留まって説法をし、この長者の一族をはじめ多くの衆生を化導しま
した。長者が病に倒れた時には、釈尊、阿難、舎利弗等が親しく館に行き説法し、悟りを得た
長者は死して都率天に生まれたと言われております。

また、貧女の一灯という話もあります。これは『王日殿御返事』に、
「貧女の我がかしらをおろして油と成せしが、須弥山を吹きぬきし風も此の火をけさず」(同 一
五四五頁)

とあります。つまり、何も御供養する物を持たない女の方が、自分の髪を切って油を求め、それを御供養して火を灯した。その時に風が吹いてきて、他の多くの火は消えてしまったけれども、真心から灯したその女の方の火だけは消えることがなかったのです。

このように御供養は、その心が大事なのです。物があるから御供養するのではなくて、その尊い心を仏様に奉るというところに大きな功德があるのです。ですから、御供養とは、あくまでも真心からするものだということを、よく御承知いただきたいと思います。

それでは次の御書に進みます。

6 高橋入道殿御返事

八万聖教の肝心・法華經の眼目たる妙法蓮華經の五字をば迦葉・阿難にもゆづり給はず、又文殊・普賢・觀音・弥勒・地藏・竜樹等の大菩薩にもさづけ給はず。此等の大菩薩等のぞみ申せしかども仏ゆるし給はず。大地の底より上行菩薩と申せし老人を召しいだして、多宝仏・十方の諸仏の御前にして、釈迦如来七宝の塔中にして、妙法蓮華經の五字を上行菩薩にゆづり給ふ。(御書八八六〇一―二行目)

この御書は建治元(一二七五)年七月十二日、大聖人様が五十四歳の時に、身延から富士の高橋入道に与えられたものであります。高橋入道の病気が重くなったので、大聖人様は日興上人と覚乗房を遣わして、この書をもって高橋入道を激励しているのであります。

この御書の内容は、末法に妙法を弘通する上行菩薩について説き、大聖人がその再誕であることを明かされております。さらに、病中にある入道を励まされて、御本尊の功德を説いて結ばれているのであります。この御書の正本・御真筆は、総本山大石寺に現存しています。

この御書に出てくる高橋入道は、詳しくは高橋六郎兵衛入道と言います。この方は駿河国富士郡の南方の賀島に住んでおりました。賀島という場所は、総本山大石寺から富士駅に向かう途中にありまして、そこに住んでいた方です。

奥さんは日興上人の叔母に当たる方で、富士地方の弘通における中心的な存在であったのが、この高橋入道であります。有名な四十九院の法難の際には日興上人を外護し、熱原法難でも多くの大聖人の門下を護っておられます。また、高橋入道殿の死後も、その夫人は大聖人様から数々の御書をいただいております。

ただいま拝読したこの御文は、結要付嘱について述べられているのであります。

釈尊は自身の滅後における妙法弘通について、まず宝塔品にて、

「誰か能く此の娑婆国土に於て、広く妙法華經を説かん」(法華經 三四七〇)

と仰せになり、仏滅後の此土弘教を勧められています。これに応じて、勸特品において二万の菩薩が此土に、それから五百の羅漢と、学無学の八千の声聞が他土に、それから八十万億那由他の菩薩が十方世界に、それぞれ弘教を申し出たのであります。

しかし、釈尊はこれら迹化他方の菩薩達が滅後の弘通を願い出たのを、涌出品におきまして、
「止^やみね、善男子」(同 四〇八^ジ)

と制止し、大地より本化地涌の菩薩を呼び出しました。そして如来寿量品を説いたのち、如来神力品において、上行菩薩等の四菩薩を上首とする地涌の菩薩に、法華経の肝要たる妙法蓮華経を付嘱し、末法流布を託されたのであります。

これを別付嘱と言います。これは、すべての菩薩に法華経を付嘱した総付嘱に対して、上行菩薩等に別して付嘱されたので、別付嘱と言うのです。だから、付嘱には総別の二つがあるので

す。ちなみに、総付嘱については、嘱累品のなかで、

「我、無量百千万億阿僧祇劫^{あそうぎこう}に於て、是^この得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり、今^{もつ}て汝等^{なんだち}に付嘱す。汝等、应当に一心に此の法を流布して、広く増益せしむべし」(同 五一八^べ)

とおっしゃって、すべての菩薩に法華経を付嘱したわけです。

別付嘱というのは、詳しく言うと、四段に分けることができます。一つは称歎付嘱、次に結要付嘱、それから勧奨付嘱、釈勧付嘱という四段から成っているのであります。

この四つの付嘱について、第二十六世日寛上人様の『依義判文抄』を拝しますと、称歎付嘱とは、

「所嘱の法体、本門の本尊の功德を歎ず」(六卷抄 一〇二^べ)

ということです。御本尊様の功德を称歎することです。それから、結要付嘱というのは四句の要法とも言いまして、これこそまさしく本尊の付嘱のことを指します。また勧奨付嘱は本門の題目を勧奨するという意味で、釈勧付嘱というのは本門の戒壇を勧奨することを指すと、日寛上人が御指南であります。

この別付嘱のなかで、中心となるのは結要付嘱であります。その結要付嘱とは何かと云えば、皆さん方も聞いたことがあると思いますが、

「要を以て之^{これ}を言わば、如来の一切の所有^{しやう}の法、如来の一切の自在の神力^{じんりき}、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の経に於て宣示顕説す」(法華経 五一三^べ)

という文であります。法華経の肝要である妙法蓮華経を右の四句の要法に括^{くく}って、釈尊は上行菩薩等に付嘱されたのであります。

大聖人様は、この結要付嘱の文をもって、三大秘法の依文であるとされています。すなわち教相の上では、神力品で上行菩薩に法華経の本迹二門の要^{かなめ}を四句の要法に結んで、滅後の流通^{るつう}のために付嘱をされておりますが、大聖人様は文底観心^{かんじん}の上から、この結要付嘱の文を依文として三大秘法を明かされているのであります。

依文というのは、依りどころとなる文証という意味でありまして、例えば寿量品の、

「如来秘密。神通^し之力」(同 四二九^べ)

は無作三身の依文となるのであります。

したがって、日寛上人の『文底秘沈抄』におきまして、

「教主釈尊の一大事の秘法とは結要付嘱の正体、蓮祖出世の本懐、三大秘法の随一、本門の本尊の御事なり。是れ則ち釈尊塵点劫より来心中深秘の大法なり、故に一大事の秘法と云うなり」(六卷抄 六四[㊦])

と仰せられているのであります。すなわち今、大聖人様が所持あそばされているところの妙法は、法華経の題目としての妙法五字ではなくして、久遠の本法たる妙法五字であり、まさしく三大秘法の随一、本門の本尊なのであります。この三大秘法は、釈尊をはじめ三世諸仏の護持する根本の法であり、三世にわたって一切衆生を救済する根源の法であります。

すなわち、久遠の本法たる妙法五字は、『御義口伝』に、

「自受用身とは一念三千なり。伝教の云はく、一念三千即自受用身」(御書 一七七二[㊦])とあるように、人即法、法即人の妙法蓮華経にして、人に約せば久遠元初自受用報身如来の再誕、末法御出現の御本仏、宗祖日蓮大聖人であり、法に約せば久遠元初の妙法、宇宙法界の根源の本法そのものであります。

よって、大聖人様は上行菩薩の再誕として末法に御出現あそばされたのでありますが、この上行菩薩としてのお立場は、あくまでも外用のお姿であって、内証深秘の辺から拝すれば、大聖人様は久遠元初自受用報身如来の再誕であります。故に、日寛上人は、

「若し外用の浅近に拠れば上行の再誕日蓮なり。若し内証の深秘に拠れば本地自受用の再誕日蓮なり。故に知んぬ、本地は自受用身、垂迹は上行菩薩、顕本は日蓮なり」(六卷抄 四九[㊦])

と、このように甚深の御教示をなされているのであります。

したがって『本因妙抄』では、

「釈尊久遠名字即の位の御身の修行を、末法今時の日蓮が名字即の身に移せり」(御書 一六八四[㊦])

と仰せになっております。また『百六箇抄』には、

「今日蓮が修行は久遠名字の振る舞ひに介爾計りも違はざるなり」(同 一六九五[㊦])

と仰せられて、行位全同をもって自受用身即大聖人様であることを明かされています。また、同じく『百六箇抄』には、

「久遠元始の天上天下唯我独尊は日蓮是なり」(同 一六九六[㊦])

と明白に仰せられております。また、三位日順師は『詮要抄』のなかで、

「久遠元初の自受用身とは蓮祖聖人の御事なりと取り定め申すべきなり」(六卷抄 五〇[㊦])

とおっしゃっております。

ところが、日蓮宗身延門流などでは、釈尊が上行菩薩に、単に法華経を弘通することを付嘱されたと言っておりますが、これは全くの間違いであります。法華経の神力品における付嘱の儀式というのは本来、久遠元初自受用報身如来であられる御本仏大聖人が、釈尊が寿量品において久遠の仏寿を開顕する時の助けとして本化の菩薩の姿を示し、かつまた末法弘通の付嘱を受

け、将来の日蓮大聖人を予証することにあつたわけでありませう。つまり、法華經に現れた上行菩薩は仮りの姿であつて、久遠の御本仏大聖人が仏法付囑の上から、過去に上行菩薩として御出現あそばされたということになるのであります。

この『高橋入道殿御返事』の御文は短いのですが、非常に大事なことが説かれているのであります。我々はよくこのことを存じて、大聖人をないがしろにするような間違つた発言をしている邪義邪宗の者達に対しては、厳しく破折をしていくべきであります。

「あしくやまはゞ国亡ぶべし」(御書 一〇六六)

とおっしゃっているように、大聖人様を悪しく敬うことは、けつしてまかりならぬことのでありますので、我々は厳しく破折せねばならないのであります。

次に七番目に入ります。

7 高橋入道殿御返事

阿闍世王は父をころし仏の敵となれり。悪瘡身に出でて後、仏に帰伏し法華經を持ちしかば、悪瘡も平癒し寿をも四十年のべたりき。而も法華經は「閻浮提人・病之良薬」とこそとかれて候へ。(御書八九一七行目)

この御文は阿闍世王の例を挙げて、病についてお述べになっているところであります。

阿闍世という方は、提婆達多にそそのかされて悪行をするわけですが、最後はやはり仏様に救われていくのであります。

この方の父は頻婆娑羅王、母は韋提希夫人と言います。元々お父さんの頻婆娑羅王が釈尊に深く帰依し、外護に励んで、子の阿闍世を愛し育てて太子となし、家来達は太子を善見と呼んでいたのであります。しかし、この阿闍世は当時、釈尊に敵対し、勝手に仏教教団を分裂させて新教団を作つた提婆達多に心を寄せて、そそのかされてしまうわけです。つまり、提婆達多は自ら新しい仏に成り替わろうとして、阿闍世をそそのかし、悪心・逆心を起こさせたのであります。

提婆達多にそそのかされてしまった阿闍世は、自分が王位に即こうとして、父王を幽閉してしまひます。そして食物を与えずに、なおかつ剣で父の足の底を削つたりするなどの悪行をなしたのです。その牢屋に幽閉された王を救おうと、奥さんの韋提希夫人は、自分の身体に蜜をいっぱい塗つて、食べる物が無い王の所に見舞いに行くわけです。そしてなんとか命をつないでもらいたい一心で、身体に塗つた蜜を食べてもらうため、苦勞をしながら通つていたのであります。

しかし、それを知つた阿闍世は、かえつて母を恨み、その母をも殺そうとしてしまうのです。その時に、大変な名医でもある耆婆大臣に諫められて思い止まつたのでありますが、頻婆娑羅王は結局、食物を断たれてしまつて、餓死してしまふのです。

そして阿闍世は自ら王位に即いたのでありますが、その後も阿闍世王は提婆達多にそそのかされて、悪象に酒を飲ませて釈尊の教団にけしかけ、釈尊や弟子達を踏み殺させようとするわけ

す。これを阿闍世王の^{すいぞう}酔象と言います。

しかし、こうした悪逆をそそのかした提婆達多は、とうとう大地が割れて、生きながら地獄に墮ちました。そのあと、阿闍世王も父を殺した罪に悩んで、母を殺そうとした時に諫められた耆婆大臣の勧めによって釈尊のもとに行き、釈尊に帰伏し、そののちは釈尊の教団の大檀那となって、王子も夫人も皆、仏弟子となったわけであります。帰依してからの阿闍世王は、法華經の^{えざ}会座に加わって仏法を深く学ぶほどに、自分の過去の悪行を後悔する心が強くなったのです。

ところが、阿闍世王が五十歳の時、二月十五日に全身に大悪瘡が出て、三月七日に死ぬと、死の宣告をされてしまうのです。そこで、耆婆大臣の勧めによって、釈尊の所へ赴いて、事情を話したのであります。すると釈尊は、阿闍世王のために^{がつあいざんまい}月愛三昧に入られました。この月愛三昧というのは、お釈迦様が阿闍世王を救うために入った三昧境のことで、仏の慈悲を月の光の様々な^{りきゆう}力用に譬えて、月愛と言うのであります。この月愛三昧に入り、祈りを込めて当病平癒を願われたということでもあります。

そして、阿闍世王に対して涅槃經を説いたのでありますが、そうしましたら、阿闍世王の悪瘡がたちまちに消えてしまったのです。そして、病気が平癒した阿闍世王は、ますます信心を深めていって、釈尊の入滅後は仏舍利を供養して大宝塔を建てたり、さらには大迦葉を中心とする五百人の比丘を集め、王舎城の付近の七葉窟^{くつ}という所で、釈尊の遺した經典を集めたりしたのです。お釈迦様が色々な所で説いてきた教えは、みんな耳で聞いていましたから、そういった内容を全部集めて、お釈迦様の言葉を經典にまとめたわけです。これを第一回の^{けつじゅう}經典結集と言いますが、その外護にも努めたということでもあります。

阿闍世王は、他の国を統合するなど、元々政治的にも非常に力のある王様であったのですが、色々なことがあって大変な悪逆を行ってしまったけれども、のちに仏法に帰依してからは、本当に仏法外護に努めたのであります。

また、阿闍世王には^{みしょうおん}「未生怨」という呼び名もありました。

阿闍世王が生まれる前の話ですが、父である頻婆娑羅王が、なかなか世継ぎが生まれなかったので、占い師に韋提希夫人を見させたところ、山中に住む仙人が死後に太子となって生まれ変わるであろう、という予言があったのです。そこで、王様は一日も早く子供がほしい一心から、その仙人を殺してしまったところ、まもなく夫人が身ごもったのであります。

そこで再び、占い師に見てもらったところ、占い師は「男子が生まれるけれども、その子は王の^{あだ}怨となるであろう」と言うのです。つまり、生まれる男の子は、まだ生まれないうちから王に怨みを持っているということで、未生怨と呼ばれたと言われます。

占いのとおりに男の子が生まれると、王はその子を恐れて、夫人と共に高い建物の上から投げ捨ててしまうのです。ところが、投げ捨てられた子供は指の骨を一本折っただけで、無事だったのです。ですから阿闍世王は、指を折るという意味の言葉から^{ぼらるし}婆羅留支とも呼ばれたと言われます。

このように、阿闍世王も生まれながらにして色々な因縁を持っていたのであり、また、そのような

因縁があるから、様々な悪逆の限りを尽くしたということもあったのでしょう。しかし最後は、やはり仏様の大きな慈悲によって救われたのであります。

さて、この御書のなかに「えんぶだいにん びょうしろうやく閻浮提人・病之良薬」とあります。この「閻浮提人・病之良薬」というのは、法華經の薬王菩薩本事品第二十三の經文で、

「此の經は則ちすなわ為れ、閻浮提の人の病の良薬なり。若し人病有らんに、是の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん」(法華經 五三九ぜ)

という部分を指しているのであります。つまり法華經こそ、すべての人々の病の薬であり、最高の薬なのですから、この大良薬を服せば、治らぬ病気はないとの意味であります。

これは身の病と心の病、共にそうなのです。心の病は、この法華經の大良薬を服せば必ず治ると仰せであり、また身の病も同じように、法華經の大良薬を服せば必ず治るとおっしゃっているのであります。もちろん、ここで言う法華經とは、今日末法に約せば文上の法華經ではなく、文底秘沈の南無妙法蓮華經のことです。この妙法の功德によって、いかなる病も消滅して不老不死になると仰せになっているのであります。

そもそも病について、大聖人様はほかにも色々とお示しであります。一つ、例を挙げてみますと、『かえんじょうごう可延定業御書』のなかには、先程の阿闍世王のお話のほかに、ちんしん陳臣という人の例を挙げられております。すなわち、

「ちんしん陳臣と申す人ありき。命知命にありと申して五十年に定まりて候ひしが、天台大師に値ひて十五年の命を宣べて六十五までをはしき。其上、ふきょうぼさつ きょうぞうじゅみょう不輕菩薩は更増寿命ととかれて、法華經を行じてじょうごう定業をのべ給ひき」(御書 七六〇ぜ)

とおっしゃっております。

陳臣という人は、中国の天台大師に値って十五年の命を延べた。「天台大師に値ひて」ということは法華經に値って、ということです。また、不輕菩薩は「更増寿命」と説かれて定業を延べたとあります。

定業という言葉が出てまいります。人間の寿命には定業と不定業とがありまして、定業というのは既に定まっている業、不定業というのは未だ定まっていない業という意味です。ですから、生まれながらにして寿命が定まっているのと、定まっていないという二種類の業があるということです。

ここに仰せられているのは、定業によって定められた命であっても、この妙法蓮華經の功德によって命を長らせることができるということです。ましてや不定業などは、当然、命を延ばすことができます。寿命が決まっている人であっても命を延ばすことができるということは、それほど妙法蓮華經の功德が廣大無辺であるということなのです。

それから、同じく『かえんじょうごう可延定業御書』のなかには、大聖人様御自身の御母君の寿命についてお述べになっている箇所があり、そこには、

「日蓮はは悲母をいのりて候ひしかば、現身げんしんに病をいやすのみならず、四箇年の寿命をのべたり。

いま
今女人の御身として病を身にうけさせ給ふ。心みに法華經の信心を立て、御らむあるべし覽（同
べ）

と仰せであります。

この『可延定業御書』は富木常忍の奥さんに与えられた御書なのですが、この方は病気で苦しんでおられたという背景があり、大聖人様は、御自分の母君が寿命を延ばされたというお話を述べられています。

当時、大聖人様は鎌倉におられました、「母の病篤あつし」という報を受けられて、故郷の安房あわにお帰りになるわけです。お帰りになると、まさに臨終正念のその時だったのですが、大聖人様のお題目・御祈念によって母君は蘇生され、さらに四ヵ年も寿命を延ばしたのです。そのことを引き合いに出され、富木常忍の奥さんに対して「心みに法華經の信心を立て、御らむあるべし」と、強盛に信心を立てていけば寿命を延ばすことができることをおっしゃっているのです。

それから『妙心尼御前御返事』には、

「人の死ぬる事はやまひにはよらず」（同 九〇〇び）

ということも仰せになっています。人が死ぬ理由は病だけではない、色々な事情があつて亡くなる方がいるということです。その例として、

「当時のゆき・つしま壱岐 対馬の子どもは病なけれども、みなみなむこ人蒙 古 びとに一時にうちころされぬ。病あれば死ぬべしふ じょうという事不定なり。又このやまひは仏の御はからひか。そのゆへは浄名經じょうみょう・涅槃經には病ある人、仏になるべきよしとかれて候。病によりて道心はおこり候か。又一切の病の中には五逆罪ぎやくざいと一闍提いっせんだいと謗法ほうぼうをこそ、おもき病傷とは仏はいたませ給へ」（同び）

と、このようにおっしゃっているのです。

ここでは、病に冒されたからといって、必ず死ぬとは限らない。むしろ、それ以外の理由で死ぬ方もたくさんいることをおっしゃっているのです。しかも「病あれば死ぬべしという事不定なり」とおっしゃりながら、さらに「病によりて道心はおこり候か」ともおっしゃっているのです。

よく『大白法』などにも、病を克服した方々の体験発表が出ておりますけれども、むしろ、病によって信心が強盛になっていくケースが実際にあるのです。皆さんのなかにも、そういった体験を待った方がいらっしゃるかと思えますけれども、本当に御本尊様の功德というものは尊いのであり、まさに妙薬であります。

ここで「病によりて道心はおこり候か」と仰せられておりますが、病があることによって、真剣にお題目を唱えられるようになる場合があるのです。今までは、そこそこしか信心していなかったような人が、病にかかったことおによって発心し、一時間、二時間、三時間と唱題したり、折伏に打って出て自行化他の信心に励むことができるようになって、いつの間にか病を克服していたというケースがあるのです。

まさに病によって道心おが発おこると同時に、もう一つ、大聖人はこう付け足されております。すなわち「一切の病の中には五逆罪と一闍提と謗法」の、この三つが最も恐ろしいのだとおっしゃっているのです。

「五逆罪」というのは、父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、仏様の身から血を出だす。仏様を殺すことはできませんから、血を出させるだけで殺人と同じ意味になるのです。そして五つ目に和合僧を破る、つまり異体同心の団結を破るといのが五逆罪です。

それから「一闡提」というのは、断善根あるいは信不具足という意味であります。つまり、仏法を信ずることなく、悟りを求める心がないような、成仏の素質を欠く者、これを一闡提と言うのであります。

また「謗法」というのは誹謗正法です。正法に背いて、信心をしない人のことを言うのです。これは『十法界明因果抄』のなかに、

「慳貪・偷盗等の罪に依って餓鬼道に墮することは世人知り易し。慳貪等無き諸の善人も謗法に依りまた謗法の人に親近し自然に其の義を信ずるに依って餓鬼道に墮することは、智者に非ざれば之を知らず。能く能く恐るべきか」(同 二〇八頁)

とあります。つまり、欲張りな人や他人の物を盗んだりする人は、餓鬼道に墮ちて苦しんでしまう。そのことは、世間の人でもよく知っています。ところが、盗みなどをしないような善人であっても、謗法によって餓鬼道に墮ちてしまうというのを仰せなのです。

我々も、知らず知らずのうちに謗法の者に近づいていって、いつの間にか、その謗法の毒気に当てられてしまつて折伏もせずにいると、今度はこちら側に罪障が降り懸かってくるのです。謗法とは、こんなにも怖いのです。だから折伏というのは、常に、どんな人にでもしなければだめなのです。

「一文一句なりともかたらせ給ふべし」(同 六六八頁)

とあるように、ひとことでいいのです。「この御本尊はすばらしいのですよ」「この御本尊を信じていけば、必ず幸せになるのですよ」ということを話すことが大事です。

私達の周りには色々な人がおります。御恩がある人とか、あるいは近所で親しく付き合っている方などがいると思います。親しくするのはよいのですけれども、表面だけ親しくて、折伏をしないというのは間違いです。やはり心ある人であれば、「一文一句なりともかたらせ給ふべし」とあるように、この御本尊様の功德を説くべきであります。「あなたも、この信心をしませんか」「この御本尊様は本当にすばらしいのですよ」と伝えるのです。

けんかをしろというのではありません。本当に慈悲の心を持って、その人を救う心を持って「一文一句なりともかたらせ給ふ」ことが大事なのです。折伏というのは、そういうところからスタートしていくのです。

ですから、まさに恐るべきは「五逆罪と一闡提と謗法」であります。五逆罪というのは罪を犯す人、一闡提とは全く信心を持たない、成仏の素質を欠く人、そして謗法に対しては、我々は必ず破折をしなければならないのです。

いつも申し上げますけれども、謗法というのは誹謗正法ですから、私達が折伏しないと、どんどん増長していきます。なかには「謗法の者は悪いことをしているのだから、罰が当たって、そのうちにだめになるよ」と言う人もいるかも知れませんが、そうではないのです。我々が折伏しなければ、

謗法は滅びないのです。

今の日本の国を、よく御覧なさい。念仏の者、真言の者、池田創価学会の者など、たくさんいるではありませんか。これらの教えは、自然には滅びません。私達が折伏するから滅びるのです。私達が折伏しなければ、謗法は消滅しないのです。だから、そのことをよく知らなければなりません。

そうでなければ、与同罪を受けることになってしまいます。先程の『南条殿御返事』に、日本の国が外国に責められるのは、大聖人様を不当に罰し迫害したことに対する与同罪、総罰だということが御書にありましたが、本当にそのようになってしまうのです。

先日の東日本大震災等についても、よく考えてみると、我々はもともと、この時にこそ、折伏を行じていかなければだめなのです。我々が、本当に仏国土を造り上げていくのです。『立正安国論』の御聖意を拝して、立派な国を造り上げていかなければなりません。このことを一人ひとりがしっかりと心に刻んで、折伏に打って出ることが大事です。

小さな幸せだけを望んでいたのではなりません。もちろん、かわいらしい子供が小さな念願をかなえる、そのようなことがけっして悪いわけではありません。けれども、そのような望みもよいのですが、私達はもともと大きな望みを持って、つまり広宣流布、仏国土実現という、本当の大理想図を実現していくことを念頭に置いて、一人ひとりが折伏をしていかなければならないのです。

今日、宗門は平成二十七年・三十三年に向かって、折伏大前進の最中^{さなか}です。これは宗門が決めた決定事項であり、一大方針であります。ですから、これにみんなが異体同心していくことが大事です。「私はちょっと考えが違う」などと、トンチンカンなことを言っていてはいけません。

つまり、大聖人様の御出現の意義は、一切衆生をことごとく成仏させることにあるのです。その大聖人様の御遺命を継いで、大聖人様の御意^{ぎょい}のままに今日、我々は戦っているのです。ここが一番、肝心なところです。それを忘れて「私はちょっと…」などと言っていたのではだめです。

大聖人様の御遺命を、本当に文字どおり、一人ひとりが心身ともに尽くしきって努めていく、そこに必ず功德が顕れてくるのです。それをしないから、なかなか自分の宿業を転換できなかつたり、色々な悩みがどんどん持ち上がってきってしまうのです。しかし、本当に広布のために尽くしていけば、そういったものは根本のところから治っていくわけですから、必ず良くなってまいります。

また、その意味の上からも、しっかりと御本尊様への確信を持つことが大切です。そして謗法を破折していくということが、今時^{こんじ}、一番大切なことではないかと思えます。

皆さん方は、当然、講中で頑張っていられっやと思いますけれども、また、これを機により一層、折伏に励んでもらいたいと思います。

次に、八番目の『乙御前御消息』であります。

8 乙御前御消息

日蓮^{こうべ}が頭^{だいがく}には大覚世尊かはらせ給ひぬ。昔と今と一同なり。各々は日蓮^{だんな}が檀那^{いか}なり。争で

か仏にならせ給はざるべき。いかなる男^{夫 為}をせさせ給ふとも、法華經のかたきならば^{したが}随ひ給ふべからず。いよいよ強盛^{ごうじょう}の御志あるべし。氷は水より出でたれども水よりも^{凄 冷}すさまじ。青き事は藍より出でたれどもか^あさぬれば藍よりも色まさる。同じ法華經にては^{り しょう}をはすれども、志をかさぬれば他人よりも色まさり利生もあるべきなり。(御書八九七^一五行目)

この御書は、建治元(一二七五)年の八月四日、大聖人様五十四歳の時、身延から乙御前の母である日妙尼に宛てられた御消息であります。

女性の身でありながら、一子・乙御前を連れて、はるばる鎌倉より佐渡へ訪ねてきた日妙尼に対して、その純真な信心^たを称えられ、諸經と法華經との比較の上から法華經^{くりき}の功力を示されて、信心を励まされているのであります。

この標題の乙御前という方は、今申し上げました日妙尼の娘さんであります。母の日妙尼は、鎌倉に住んでいた寡婦^{か ぶ}、つまり夫を亡くした御婦人でありましたけれども、大聖人様が佐渡配流中に、この乙御前を連れて大聖人様の所を訪ねておられます。当時、佐渡へ行くなどということは本変な旅だったのですが、そのようななか、山海を隔てて大聖人様をお訪ねしたということは、まことに強盛な信心の表れであると思います。

また、大聖人様が身延に入られたあとの話になりますが、阿仏房は佐渡から三度、身延の山へ登られて、大聖人様にお会いしております。これも本当に今、我々が考えているような道中ではなかったと思います。大変な難儀をしながら、三度も大聖人様をお訪ねするということは、ひとえに信心の強盛さ故ではないかと思ひます。

大聖人様は、日妙尼に対して「日妙聖人」という、非常に有り難いお名前を与えていらっしゃるのですが、これは、

「日本第一の法華經の行者の女人なり。故に名を一つつけたてまつりて不輕菩薩の義になぞらえん。日妙聖人等云云」(御書 六〇七^一)

とお認めになり、「日妙」という法号を授けて激励されております。これは乙御前を連れてはるばる佐渡の配所まで大聖人様を訪ねた、その深い信心を褒められているのです。

同じお手紙のなかで、大聖人様は樂法梵志や雪山童子などの死身弘法^{ぎょうぼうほんじ}の求道心^{ぐ どうしん}を述べて、仏道修行の在り方を示されるとともに、法華經を信ずる功德を説き、さらに女人の求道の困難なことを述べた上で、このように褒められているのです。つまり、大変な困難にもかかわらず、信心強盛であることを愛でていらっしゃるのであります。

最初に「日蓮^{こうべ}が頭^{だいがく}には大覚世尊かはらせ給ひぬ。昔と今と一同なり」という御文がありますが、竜の口の法難の折、大聖人様がまさ^{くび}に頸を切られんとした時、不思議な現象として江ノ島のほうから光りたるものが現れて、太刀取りは目がくらんで倒れ伏し、大聖人様の御頸を切ることができなかったのです。このことは『種々御振舞御書』に、

「江の島^島のかたより月のごとく^光ひかりたる物、まりのやうにて辰巳^{たつ み}のかたより戌亥^{いぬ い}のかたへ^光ひかりわたる。十二日の夜^{味 爽}のあけぐれ、人の面^{おもて}もみへざりしが、物のひかり^光月よのやうにて人々の面^夜

もみなみゆ。太刀取目くらみたふれ臥し、兵共おぢ怖れ、けうさめて一町計りはせのき、或は馬よりをりてかしこまり、或は馬の上にてうづくまれるもあり」(同 一〇六〇㊟)

おっしゃっているのです。

つまり、大聖人様の御頸を切ろうとした時に、江ノ島のほうから光物が現れ、太刀取りの目がくらんで、そして周りの者も「一町計り」とあるとおり、みんな遠のいてしまったのです。ある者は馬か下りてしまい、ある者は馬の上で動くともできずに驚くばかりであったのです。まさに時の権力をもってしても、大聖人様を亡き者にすることはできなかったのです。

そして、この時の「月のごとくひかりたる物」について、『四条金吾殿御消息』には、
「三光天子の中に月天子は光物とあらはれ竜口の頸をたすく」(同 四七九㊟)

とおっしゃっております。

「三光天子」というのは、太陽と月と星のことです。日天子と月天子、それから明星天子を合わせて三光天子と言うのであります。竜の口の法難の折には、このうち月天子が現れて、大聖人様をお護りしたと仰せなのであります。

すなわち、大聖人様は文永八(一二七一)年九月十二日に、松葉ヶ谷の草庵において幕府の兵士達に捕らえられるのです。そして、そのまま武蔵守殿の屋敷に連行されて、その日のうちに竜の口へ連れ出されて斬首されるという手はずになっていたのです。そのために、わざわざ夜半、子の刻、今で言うと午前零時に大聖人様を武蔵守殿の屋敷から連れ出して、竜の口へ向かうのであります。

その途中、若の宮の八幡宮の社前に差し掛かった時に、大聖人様は馬から下りられ、取り騒ぐ兵士どもを制止なさり、八幡大菩薩に向かい大音声をもって「今、かかる大難に際し、八幡大菩薩の守護の用きがないのはどうしたことか」と叱咤されるのです。

実は、八幡大菩薩などの諸天善神は法華経において、

「諸天昼夜に、常に法の為の故に、而も之を衛護す」(法華経 三九六㊟)

と、法華経の行者を必ず守護するという誓いを立てられているのです。したがって、法華経の行者を護ると誓ったはずの諸天善神に対し、「その誓いを、この大事な時に果たさないとは何ごとか」と、しかりつけたのであります。

要するに、この時に現れた光物という現象は、大聖人様が八幡宮の社前で八幡大菩薩を叱咤されたことと呼び覚まされた、三光天子のなかの月天子の用きなのです。光物はその月天子の眷属となって、大聖人様を守護されたということになるのであります。

このことについて、当抄では「日蓮が頭には大覚世尊かはらせ給ひぬ」とおっしゃっているのです。つまり、大聖人様が頸の座の大難を逃れたのは、大覚世尊、すなわち仏世尊が身代わりになられたためである。そしてそれは「昔と今と一同なり」と仰せられているのです。

この「昔と今と一同なり」とは、どういうことでしょうか。この御文の直前に、

「くまらゑん三蔵と申せし人をば木像の釈迦をわせ給ひて候ひしぞかし」(御書 八九七㊟)

とあります。この鳩摩羅琰三蔵という人は、法華経などを漢訳した羅什三蔵のお父さんでありま

す。この方は聡明で意志が強く、立派な宰相という位にいたのでありますが、それを辞退して僧侶になり、^{きじ}亀茲国の国師になった人です。

伝えるところによりますと、インドの弗沙密多羅王が^{ほっしやみつたら}国中の仏法を滅ぼした時に、この鳩摩羅琰三蔵は仏像を護るため、仏像を持して自国を出て亀茲国に逃れたのですが、その途中、昼は仏像を背負って亀茲国へ向かい、夜は、今度は仏像が鳩摩羅琰三蔵をおぶったという話があるのです。ここでは、そのことを仰せなのであります。

つまり、仏法のために尽くしていけば、必ず仏法によって護られるということをおっしゃっているのです。昼は仏像を背負い、夜はその仏像に背負われて、ということをおっしゃっているのだから、今日の我々に置き換えて言えば、まさに私達の信心に込めて、御本尊様が大きな力を与えてくれるということなのです。

その例として、大聖人様は御自身の竜の口における御難と、この鳩摩羅琰三蔵の話を挙げられ、「昔と今と一同なり」と仰せになっているのであります。

そして、日妙尼に対しては「あなたは日蓮の檀那である。日蓮の教えのとおり信心を實踐していけば、かくの如く護られる。成仏できない道理はない」と励まされているのであります。

次に「いかなる男を^夫せさせ給ふとも、法華經のかたきならば^{したが}随ひ給ふべからず。いよいよ強盛の御志あるべし」と仰せですが、日妙尼は夫を亡くされた方でありますので、このあと、どのような人を夫とされても、法華經に敵対する人ならば随ってはならないと、厳しくおっしゃっているのです。

随ってはならないという意味は、折伏をしなければいけないということなのです。仏法を中心に考えると、このことは非常に大事なことであります。

やはり縁があつて結ばれる二人は、まさに一心同体でありますから、もし夫が謗法を犯していたら、しっかりと折伏をしなければいけません。このことを仰せなのです。「随ひ給ふべからず」ということは、何も「けんかしろ」という意味ではありません。彼の間違った信仰に近づいてはならない、随ってはならないという意味でありまして、むしろ逆に折伏をしなければいけないという意味があるのです。

次に「氷は水より出でたれども水よりも^凄すさまじ。青き事は藍より出でたれども^重かさぬれば藍よりも色まさる。同じ法華經にてはをはすれども、志をかさぬれば他人よりも色まさり^{りしよ}利生もあるべきなり」とあります。

これは、氷は水からできるけれども、水より冷たい。また、青は藍から作られるけれども、藍よりも青い。これと同じように、法華經を持って信心の志を重ねるならば、すなわち信心強盛に懸命に励んでいくなれば、ほかの人よりも法華經の力を輝かせ、功德を得ることができるとおっしゃっているのです。もちろん、ここで法華經とおっしゃっているのは大御本尊様のことであります。

そもそも仏法では、祈り^{りき}をかなえ、成仏するための^{かなめ}要として、四つの力というものを示しております。これを「妙法の四力」と言います。妙法蓮華經の四つの力ということであり、信力・行力・仏力・法力のことです。

このことについては、日寛上人の『観心本尊抄文段』に詳しく出ておまして、

『信力』とは一向に唯此の本尊を信じ、此の本尊の外には全く仏に成る道無しと強盛に信ずるを即ち『信力』と名づくるなり」(御書文段 二二八[㊦])

つまり、この御本尊以外に成仏の道はないと信ずることを信力と言うのです。そして、

「天台の所謂『但法性を信じて、其の諸を信ぜず』とは是れなり」(同[㊦])

と仰せであります。

次に行力については、

『行力』と言うは、日出でぬれば灯^{とも}詮無し、雨降るに露は詮無し。今末法に入りぬれば余経も法華経も詮無し。故に余事を雑えず、但南無妙法蓮華経と唱うるは即ち是れ『行力』なり」(同[㊦])

と、一生懸命にお題目を唱えることを行力とおっしゃっております。それから、

『法力』と言うは、既に迹中化他の三世の諸仏の因果の功德を以て、本地自行の妙法五字に具足す。故に此の本尊の力用、化功広大・利潤弘深なるは即ち是れ『法力』なり」(同[㊦])

とおっしゃっております。そして、

『仏力』と言うは、久遠元初の自受用我が身の当体、自行化他の因果の功德具足円満の妙法五字を『我本立誓願』の大悲力を以ての故に一幅の本尊に図顕し、末法の幼稚に授与する時、我等此の本尊を受持すれば自然に彼の自行化他の因果の功德を譲り与え、皆咸く我等が功德と成し、『如我等無異』の悟りを開かしたもうは、偏に是れ『仏力』なり。若し仏力・法力に依らずんば何ぞ能く我等が観心を成ぜんや」(同[㊦])

と仰せになっております。

要約して申し上げますと、信力というのは、とにかく御本尊様を絶対と信じ奉ることです。そして行力というのは、全く余事を雑えず南無妙法蓮華経と唱え奉ることです。法力とは何かといえば、妙法に具わる広大深遠なる利益のことを言うのであります。また仏力とは何かというと、仏様が衆生を救う誓いを立て、その成就を願うことで、非常に大きな慈悲であります。この四力が成就して初めて、我々は成仏に至ることができるのであります。

ただし、我々の信心に当てはめれば、御本尊は既に偉大なる仏力・法力を具えられたところの御当体であります。しかし、その仏力・法力も、それを受持する人の信心の深さ、すなわち信心と、その信心に立った粘り強い実践、つまり行力があって初めて顕れてくるのであります。

だから、信心が弱く、実践の行力も進まなければ、御本尊の仏力・法力がいかにも甚大であっても、その力は顕れてきません。どこまでも、自らの信心・行力を奮い起こし、強盛なる信心を貫き通すことが、一生成仏のためには絶対に必要なのであります。

このことは『王舎城事』に、

「弓のつよくしてつるよはく、太刀つるぎにてつかう人の臆病なるやうにて候べし。あへて法華経の御とがにては候べからず」(御書 九七五[㊦])

と仰せの如くであります。また『持妙法華問答抄』には、

「『唯我一人のみ能く救護を為す』の仏の御力を疑ひ『以信得入』の法華経の教への繩をあや

ぶみて『決定無有疑』の妙法を唱へ奉らざらんは力及ばず。菩提の岸に登る事難かるべし。不信の者は墮在泥梨の根元なり。されば経には『疑ひを生じて信ぜざらん者は則ち当に悪道に墮つべし』と説かれたり(同 二九六頁)

ともおっしゃっております。

この御文から解るように、我々が持つところの御本尊に功德の差はありません。今日、これだけ大勢いらっしゃっていますが、皆さんの御家庭に安置している御本尊様の功德に差はないのです。

では、なぜ我々が頂戴する功德に差が出てくるのか。功德に差が出てくるのは、御本尊様の仏力・法力に差があるのではなくして、我々の信力・行力に差があるからなのです。やはり一生懸命、自行化他の信心に励むということが大事であります。

また、折伏も同じです。「祈りとしてかなわざるなし」と言われますけれども、祈りがかなうか、かなわないか、つまり折伏ができるかできないかは、結局は我々の信力・行力如何なのです。我々が強盛なる信力・行力を持って行じていけば、折伏はできるのです。

そもそも、折伏はやればできるのです。できないのは、やらないからなのです。

先般、お亡くなりになりましたけれども、九州に常智院日浄上人という方がおられました。この方が口癖のように「折伏は、折伏すれば必ずできる」とおっしゃっていました。まことに言い得て妙です。できないのではないのです。やらないからできないのです。

ですから、今、宗門が平成二十七年・三十三年に向かって大前進をしている時、先程も言いましたとおり、「一文一句なりともかたらせ給ふべし」で、下種折伏を一人ひとりがしっかりと続けていっていただきたい。「継続は力なり」ですから、途中であきらめず、どこまでも折伏を行じていくということが、極めて大事であります。

どうぞ、皆さん方はそれぞれの支部にお帰りになったら、このことを支部の皆さんにお伝えして、みんなで本年度の誓願を達成していただきたいと心から願う次第であります。

今日はこれもちまして、講義を終了いたします。